

## 20世紀前半イギリスにおける教会・心理学者・ 精神科医の相克

——スピリチュアル・ヒーリング問題をめぐって——

高 林 陽 展

Spiritual Healing in Early Twentieth-Century England: A  
Medico-Religious Struggle between Church, Psychologists  
and Psychiatrists

Akinobu TAKABAYASHI

This paper explores the historical relationship between “mind and body” in early twentieth-century England. In particular, it focuses on a controversy on spiritual healing argued in interwar years by clergymen of the Church of England, psychologists and psychiatrists. Spiritual healing, which boomed in England, provoked them significantly, because its advocates insisted that spiritual care could lead to the cure of physical diseases. This paper shows how clergymen, psychologists and psychiatrists answered the movement of spiritual healing, and, to this end, argues that the meaning of mind and body was still negotiated in the early twentieth century.

### 要 旨

本稿は、20世紀前半のイギリスにおける精神＝身体観を検討するものである。具体的には、この時期に登場したスピリチュアル・ヒーリング（霊的な癒しによって身体的疾患を治そうとする半宗教的・半医療的实践）に関するイングランド国教会、医師、心理学者の議論を取り上げる。この検討を通じて、近代化が進む当該期においてもなお、科学と宗教は精神＝身体観をめぐる交渉を展開していたことを確認する。

### はじめに

19世紀後半から20世紀前半のイギリスでは、社会の近代化が著しく進む一方で、その反動として反近代的な事物や思想に対する関心が強まっていった。例えば、都市化が進んだ結果として田園風景の価値が高まったこと、あるいは工場における大量生産が一般化したために伝統的な手工芸品が珍重されるようになったことがそうである。近代化すればするほど、反近代的なものの価値は高まったのである。これは、医学・医療においても同様であった。近代医学が物質主義的なアプローチをとればとるほどに、神秘主義的、あるいは超自然的な治療法もある種の復権を果たしていった。その中でも、比較的大きな関心が寄せられたのは、宗教的信仰に基づく身体の癒し（ヒーリング）であった。病んだ身体に対して手術や投薬といった物質主義的な治療を志向するのではなく、病んでいるのは魂だとして、祈りや儀礼による治療効果を強調するスピリチュアル・ヒーリングが流行したのである。

スピリチュアル・ヒーリングは、19世紀後半以降、魂の存在への信仰表現であるスピリチュアリズムが宗派の別を超えて流行したことを背景としている。スピリチュアリズムは、歴史家ジャネット・オッペンハイムに従えば、近代の申し子である<sup>1)</sup>。産業化された社会が成熟し、科学への信頼が高まり、物質的な文明が開花した19世紀、教会礼拝への参加率がこの時期に著しく低下した19世紀において、人々は超自然的な存在を完全に否定し、科学的な世界観を受け入れたわけではなかった。唯物論的な思考に違和感を覚える人たちは、貴族や労働者といった階級を問わず存在し続けていた。彼らは、魂という超物質的な存在は科学的手法によって実証可能であり、死後の霊は実際に経験され、交信することができると主張したのである。しかも、スピリチュアリズム信仰は、キリスト教の教義とは必ずしも矛盾するものではなかった。スピリチュアリズムを信奉する人たちの多くは、霊魂の不滅を信じることはキリスト教的だと考えており、それゆえ、爆発的に流行することとなったのである<sup>2)</sup>。

スピリチュアリズムの流行は、既存の教会（本稿では特にイングランド国教会）にとっては由々しき事態であったが、その副産物として登場したスピリチュアル・ヒーリングはより深刻な問題であった。信仰による魂の癒しとは、聖書に記された奇蹟、初期教会の輝かしき成果をモチーフとし

たものであった。それが、19 世紀後半において、神学教育を受けていない新興の宗教家たちの専売特許となろうとしていた。これは、イングランドの正統教会たるイングランド国教会としては看過できない事態であった。また、スピリチュアル・ヒーリングは、宗教だけではなく医療の世界にも抵触する問題であった。スピリチュアル・ヒーラーの言うところの魂の癒しとは、身体と精神の疾患にかかわる治癒をも導くものであった。例えば、スピリチュアル・ヒーラーたちは、祈り、手かざし、聖油などによって、癌などの不治の病を治したと主張した。これは、宗教的に読めば奇蹟の体現であるが、医学的には非正規医療の実践であった。

その結果、魂の癒しをめぐる問題は、教会と医科学者たちの間で論争の種となった。医科学者の中でもこの問題を受け止めなければならなかったのは精神科医と心理学者であった。なぜならば、魂の癒しによって身体が癒されるというスピリチュアル・ヒーリングの論理は、精神的な状態の改善によって身体的な状態が改善されるという精神科医・心理学者の主張とアナロジー的関係を持っていたからである。彼らは、自らの専門的知識の重要性を述べる際、精神と身体は互いに連関しており、精神科医なくしては身体的疾患の治癒は難しいということを度々強調していた。自らの専門性を広く取ることで、彼らは自らの権威を補強しようとしたのであり、心の科学を追求した者たちにとって、スピリチュアル・ヒーリングは潜在的な競合相手だったのである。その結果、19 世紀末から 20 世紀前半のイギリスでは、教会、精神科医、心理学者、スピリチュアル・ヒーラーたちはそれぞれの思惑から競争と交渉を繰り返していった。本論文が明らかとするのはこの歴史的な過程とその結末である。

ここで先行研究について述べておくと、本論文が対象とする 19 世紀末から 20 世紀初頭イギリスにおけるスピリチュアル・ヒーリングについては、ほとんど研究が存在しない。例外的には、宗教史家スチュアート・ミューズによる論文がある<sup>3)</sup>。ミューズの研究は、本論文にとっても重要な研究であり、以下の各所で参照される。しかし、その議論は 1920 年代初頭の教会側の対応に限定されたものであり、教会・心理学者・精神科医の相克にまで踏み込むものではない。ミューズ以外の研究者の関心を集めなかったのは、この主題が当時のイギリスで注目されていなかった些事だったからではない。当時の医学雑誌や教会関連の出版物では頻繁に議論され

ており、史料はふんだんに残されている。それが歴史学研究者に等閑視されてきたのは、宗教に対する医科学の勝利、魔術に対する科学の勝利という現代的な歴史観が支配的だったためであり、20世紀前半という時期が歴史学の対象にはなってこなかったためである。この歴史学上の陥穽を埋めること、それが本論文の目的である。

まずは、スピリチュアリズムの展開から語り起こしてゆこう。その上で、イングランド国教会、心理学者、精神科医によるスピリチュアル・ヒーリングに関する議論を順にみてゆきたい。

## 1. スピリチュアリズムからスピリチュアル・ヒーリングへ

### ー J・M・ヒクソンとクリスチャン・サイエンス ー

イギリスにおいてスピリチュアリズムが広まったのは、1860年代のことであった。アメリカのラップ現象に起源をもつスピリチュアリズムは、この時期になって、イギリスに定着していった。それ以前は、霊媒師たちの多くはアメリカ人であり、組織化の動きもなく、小規模な地方サークルがあるのみであった。それが、1860年代になると全国的な組織化が進み、会誌も発行されるようになっていった。1862年の『スピリチュアル・マガジン』(*Spiritual Magazine*) 創刊、1861年のキリスト教心霊主義問題研究会 (Christian Spiritual Enquiries) の設立、1868年のイースト・ロンドン心霊主義協会 (East London Association of Spiritualists) の設立などがそれである。スピリチュアリズムの支持者たちは、都市部では知識人や貴族階級の人々、イングランド北部では労働者階級が中心であった。あたかもキリスト教に替る宗教であるかのように、スピリチュアリズムは、イギリスでも広く信じられるようになった。

スピリチュアリズムは、第一次世界大戦の後、より大きな社会的影響力を確保するようになった。戦死者の魂と交信したいという要望が、スピリチュアリストたちに多く寄せられたためである。この過程でスピリチュアリズムの有力な支持者となったのが、アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) である。戦間期に彼は、スピリチュアリズムに関する歴史書を執筆するなど、その広報活動の中心的な役割を担うようになっていった<sup>4)</sup>。しかし、第二次大戦期において、霊媒師たちが主張した戦況に関わる予言 (「1939年8月和平」予言、「ヒトラー咽頭がん」予言、

「1942 年末終戦」予言) がことごとく外れると、スピリチュアリズムは詐欺行為とみなされるようになった。その結果、警察の摘発キャンペーンが強化され、没落の一途をたどっていった<sup>5)</sup>。

スピリチュアリズムの流行は、広義においては、スピリチュアル・ヒーリングの展開を準備するものであったが、実際には直接的な因果関係は存在しなかった。イギリスにおけるスピリチュアル・ヒーリングの先駆者は、J・M・ヒクソン (James Moore Hickson, 1868-1933) である。ヒクソンは、そもそもは宗教にも医療にも関係を持たない事務職の人間であった。しかし、次第に医療的な電気マッサージや催眠術へ関心を持つようになり、病者への治療行為をごくごく個人的に始めたという<sup>6)</sup>。1905 年になると彼は、裕福な女性支援者を得て、エマニエル会 (Society of Emmanuel) を設立し、スピリチュアル・ヒーリングの伝道に乗り出した。当時のパトロンには、時のベドフォード公爵夫人、サマセット侯爵夫人、モーズリー侯爵夫人などがいたとされる<sup>7)</sup>。当初の活動は、ロンドン南部のウールウィッチやボプラーなどの社会主義者が教会勢力に攻勢をかける地域で進められ、下層階級の第三世界信仰を利用して成功を収めていった。

彼の名前を世に知らしめたのは、1919 年から 24 年にかけて行われたワールド・ツアーである。1919 年に渡米し、同地で聖油と手かざしで麻痺、癌などの患者を治癒したとの逸話を得ると、1922 年にケープタウン、1923 年にオーストラリアへと渡り、各国で同様の手法を用いたヒーリングを実践していった。直接会いに行けない患者の場合は、彼が祈りを込めたハンカチを贈り、それを病者の身体にかざすことでヒーリング・パワーを伝達する方法が採られたという。

ちなみに、ヒクソンは日本にも滞在し、群馬県の草津温泉で 5 名のハンセン病者と面会し、スピリチュアル・ヒーリングを施している。1921 年 10 月のことである。ヒクソンを招へいたのは、日本の聖公会伝道者コーンウォール・リー (Cornwall Legh, 1857-1941) であった。彼は、草津温泉においてハンセン病者の救済事業である聖バルナバ・ミッションを展開していた<sup>8)</sup>。リーは、病者のための「祈りの園」「満足の家」「慈しみの家」などの施設を建設したものの、癒しの秘儀が欠けていると考え、ヒクソンの来日を要請したのである。この要請に応じて、ヒクソンは、東京、軽井沢を経て草津を訪れ、19 名の患者からの治癒、回復兆候の告白を得

たとされる<sup>9)</sup>。

さらに、帰国後の1924年、ブラッドフォードで行ったヒーリング・ミッションが、彼の名声を確かなものとした。これは、ブラッドフォード主教のお墨付きの下、フリンジング・ホール教区教会（Frinzinghall Parish Church）で行われたものである。後に、ロンドン、パディントン（Paddington）の聖ミカエル教会（St. Michael Church）やオール・エンジェルズ教会（All Angels Church）でも同様の催しが執り行われた。ブラッドフォードでのヒーリング・ミッションは、多くの病者を引きつけた。フリンジング・ホールの教区教会には、癒しを求める祈りの声と奇蹟を目撃した驚きの声が満ちていたと言われる。『イギリス医学雑誌』（*British Medical Journal*）は、ブラッドフォード大主教の参加の下、約1,200人から約1,300人が手かざしによる治療を受け、6人から8人の患者の容体が改善したと伝聞的に報じている<sup>10)</sup>。その患者の症状はいずれも身体的なものであった。リウマチ性神経痛を患い、右手が生まれつき麻痺している初老の家政婦、脊髄麻痺の患者、5年間失明している女性、1年間左半身が麻痺している女性などである。

イングランド国教会の聖職者がヒクソンのヒーリング・ミッションを支援したのは、彼が聖書に示された初期キリスト教会の秘儀をなぞり、聖油と手かざしという方法を採用したためであった。1924年に刊行された主著『病者を癒せ』（*Heal the sick*）において、ヒクソンは、医学が手の施しようのない不治の症例については、神の手助けを借りた魂の治療が必要だと主張した。その神とはキリストであり、魂の治療の方法は聖油と手かざしという初期教会の伝統にのっとったものであった。これは、明らかにカトリック的な秘儀を志向するものであり、またヒクソンという聖職に無縁の人物によって奇蹟が体現されることには、高位聖職者の間で強い抵抗が存在していた。抵抗というよりは、教義上認めがたかったと言ってもよい。イングランド国教会は、魔術や霊の呼び出しを教義上認めておらず、魂は直接地獄か天国へ行くものという考え方を堅持していた。しかし、教会離れが続く20世紀初頭において、ヒクソンが生み出した宗教的熱狂は、国教会の下位聖職者に教会再興の可能性を感じさせた。彼らは、カトリック性には目をつぶり、その魅力に興じていったのである。

ヒクソンがもたらしたヒーリング・ブームは宗教の域に留まるものでは

なかった。不治の病に限ったこととはいえ、病者が医師や医療施設ではなく周縁的な教会に助けを求めるという事態を、医師たちは退行的なものとして受け止めた。しかし、ヒクソンはそのような批判を気にもとめず、当時の医療のあり方に公然と異を唱えた。上述の 1924 年の著書において「我々の精神病院と保養所は暗い迷宮の中にいる魂を抱えている」と述べ、「不治の患者のための保養所と病院は満床であり、その規模は拡大している」と述べ、自らのヒーリング・ミッションこそ既存の精神医療に取って代わるべきものだと主張したのである<sup>11)</sup>。この彼の主張について補足しておく、その内容自体は的を射たものである。19 世紀末から 20 世紀初頭のイギリスでは、精神病院は患者の過剰収容問題に悩まされており、一般病院や保養所への需要も増大する一方であった。こうした背景からすると、ヒクソンの主張は効果的なものだったと言えるだろう。

イギリスにおけるスピリチュアル・ヒーリングは、ヒクソンとはまた別に、もう一つの系譜を持っていた。「反物質主義の十字軍」クリスチャン・サイエンス、アメリカの宗教家メアリ・ベイカー・エディ (Mary Baker Eddy, 1821-1910) である。かの女は、ニュー・イングランドの農家出身であり、医学についても神学についても教育を受けていなかった<sup>12)</sup>。彼女が医学・神学に関心を持つ転機となったのは、かの女の持病である発作的な麻痺症状がメスマー流の治療 (19 世紀初頭に流行った催眠術の治療法) で解消したことであった。ここから、かの女は催眠術に感化され、他の病者たちに病の存在を否定することに関心を深めていった。そして、1875 年、『科学と健康』(*Science and Health with Key to the Scriptures*) を世に問い、一説には 100 万、200 万とも言われる信者を獲得していった<sup>13)</sup>。クリスチャン・サイエンスの伝道者がイギリスに現れたのは、1897 年に、クリスチャン・サイエンスの講師が派遣されたことによる<sup>14)</sup>。その時点では、イギリスではクリスチャン・サイエンスに対する関心は非常に薄かったが、ヒクソンへの関心の高まりとともに、類似した教義を持つクリスチャン・サイエンスもまた、スピリチュアル・ヒーリングの有力な一派として注目を浴びていった。

クリスチャン・サイエンスの教義の根本にあったのは、物質主義の否定である。エディによれば、物質は感覚も生命も持たない。つまり、物質としての身体それ自身は、苦痛を覚えることは無い。人間が苦痛を覚えるの



は、魂の病みによるものである。神聖なる魂は苦痛を覚えない。真実には苦痛は無く、苦痛の中に真実もまたない。しかし、信仰心、敬虔さが欠落したとき、魂は病み、身体的な苦痛が引き起こされる。つまり、身体的苦痛の原因は魂の墮落であり、物質的な起源なりメカニズムなりをもたない。エディの論理はこのように展開される。そこで治療の手段となるのは、信仰、祈りのみである。祈りによって魂の神聖さと真実性は回復され、身体の苦痛もまた消え去るというのである。

エディの教義は、聖油と手かざしという手法ではなく祈りを用いた点では、ヒクソンとは異なるものである。しかし、身体に対する魂の優越、魂の治療による病の治療をうたっている点は共通しており、当時の人々、そしてイングランド国教会は、ヒクソンとクリスチャン・サイエンスを同列に扱い、スピリチュアル・ヒーリング問題として論じていった。国教会は、彼らにどのように向き合ったか。この点を次節で見てゆきたい。

## 2. イングランド国教会とスピリチュアル・ヒーリング

スピリチュアル・ヒーリングの勃興は、国教会聖職者にとっては、両義的な問題であった。高位の聖職者たちが、自らの正統性を犯し、教会の危機を深刻化させるものと受け止める一方で、下位の聖職者たちは、社会の世俗化に抗する契機として肯定的に受け止めていた。どちらの懸念も、国教会がおかれた歴史的状況を踏まえたものであった。

国教会が直面していた歴史的事象の一つは、神秘主義的な新興宗派の乱立である。19世紀後半以降のイギリスでは、工業化と都市化の進展にともない、国教会の日曜礼拝への参加者が減りつづけていた。しかしそれは、社会全体の世俗化を意味するものではなかった。19世紀は、決して「科学」の勝利一色に彩られた時代ではなかったのであり、神秘主義的な新興宗教団体は多くの人々の信仰心を引きつけていたのである<sup>15)</sup>。イングランド国教会は、神秘主義の再興という事態に直面しており、その中の一つがスピリチュアル・ヒーリングであった。下位聖職者たちは、この状況を重く受け止め、スピリチュアル・ヒーリングへの期待を高めていった。

下位聖職者のスピリチュアル・ヒーリング熱について一例として、1904年に国教会の若い聖職者たちが設立した「健康のためのギルド」(Guild of Health)を挙げておきたい。この団体の中心人物は、国教会聖



職者ハロルド・アンソン (Harold Anson, 1867-1954) である。貴族の家庭に生まれ、オックスフォードで教育を受けた彼は、国教会で着実なキャリアを積み、最終的にはロンドンのテンプル教会でマスターを務めている。リベラルな説教師であり、一貫してスピリチュアル・ヒーリングを支持した人物である。アンソンは、1909 年から 1928 年までこの団体のチェアマンを務め、国教会版スピリチュアル・ヒーリングの実践を試みた。この団体の活動については後述する。ここでは、国教会上層部は、こうした団体からの圧力を受けていたことのみ確認しておきたい。

他方で、19 世紀末以降、国教会は、医科学との関係を再編する必要に迫られていた。19 世紀の末までの医学の発展は、人体の病理や生理に関する知見を前進させるものではあったが、治療上の成功には必ずしも結びつかなかった。ほとんどの病に対して有効な治療法は存在せず、医師たちは、半ば実験的な治療法の試行に明け暮れていた。それが、細菌学の登場によってワクチンによる予防法が確立され、消毒技術の発展により外科手術の成功例が増えてゆくと、医学の社会的権威はより大きなものとなっていった。

一方に神秘主義的な新興宗教、他方に発展する医科学を見据えて、国教会は、神秘主義へ回帰するののかという問いと同様に、科学的思考を許容するののかという問いとも向き合い、その立ち位置を決定せねばならなかったのである。

この問いに対して、国教会が採った結論は実に玉虫色なものであった。教会の影響力確保のためにスピリチュアル・ヒーリングを志向しつつも、それが医者との軋轢と起こさず、彼らの認知を得たうえで行うべきだとした。つまり、スピリチュアル・ヒーリングへの科学のお墨付きを得ることで、既存のスピリチュアル・ヒーリングとの差別化をはかり、また科学者とも友好的な関係を保とうとしたのである。

より具体的に見てゆきたい。イングランド国教会は、スピリチュアル・ヒーリング問題を、1908 年、1920 年、1930 年、1958 年のランベス会議の議題として取り上げた。信者拡大の手を欠く国教会上層部にとって、スピリチュアル・ヒーリングは看過できない問題であった。特に、下級聖職者は、スピリチュアル・ヒーリングを教会組織の末端における信者の獲得・維持に有効なものとも見ており、彼らを懐柔するためにも、この問題を避け

ることはできなかったのである<sup>16)</sup>。

1908年のランベス会議では、スピリチュアル・ヒーリングを検討する評議会をロンドン主教区に設置することが提案され、教会におけるスピリチュアル・ヒーリングの実践が真剣に目指された<sup>17)</sup>。翌年3月には、カンタベリ大主教ランデル・デヴィッドソン (Randall Davidson, 1848-1930) は、ヒクソンをランベス・パレスに招いて私的な懇話会を開いた<sup>18)</sup>。その目的は、ヒクソンとの友好関係をもとにして、国教会独自のスピリチュアル・ヒーリングを確立することであった。しかし、国教会としては、ヒクソン流のスピリチュアル・ヒーリングをそのまま取り入れるわけにはいかなかった。ヒクソンの手法は、秘儀的な要素があまりにも強かった。一方ではカトリック的、他方では迷信的と非難されかねなかったのである。そのため、第一次世界大戦以前の時期において、国教会はスピリチュアル・ヒーリングを採用することは無かったのである。

それが、大戦後になって本格的な採用へと動き出したのは、後述するように、戦争神経症の多発とその治療に用いられた心理療法の成功を背景とするものであった。国教会は、心理療法の技法を援用することで、スピリチュアル・ヒーリングを科学的に正当化することができると考え、心理学者と精神科医に接触し、彼らのお墨付きを得ようとしたのである。この動きが具体化したのは、1920年のランベス会議においてである。この会議では、63号決議において、カンタベリ大主教によってスピリチュアル・ヒーリング検討委員会が任命され、ヒクソン流のスピリチュアル・ヒーリング手法である、手かざしと聖油の使用が検討されることとなった<sup>19)</sup>。国教会上層部としては、ヒクソンを支持する下級聖職者に配慮して国教会内でのスピリチュアル・ヒーリングの実践を企図する一方で、検討委員会において科学者からの支持を得ることで、神秘主義的というレッテルを回避しようとした。

この年の別の決議でも、スピリチュアル・ヒーリングの推進と科学者からのお墨付きを得るという二つの思惑が確認できる。55号決議では、「スピリチュアリズム、クリスチャン・サイエンス、汎神論的輪廻説といった思想と関係した最近の運動は、物質的な宇宙観に対する抵抗する点で、キリスト教会と道を同じくするものであり、ある点に関しては真実の無視された側面を強調するものである」と述べられている。もちろん、その担い

手は、国教会聖職者でなければならなかった<sup>20)</sup>。

ただし、スピリチュアル・ヒーリングの実践は新興のヒーラーたちの言うがままであってはならなかった。56 号決議は以下のように記されている。

我々は、人間の意識に関する新しい知見を知った。心理学者によって、可能な限りの科学的手法によって注意深く調査されたものである。しかし、科学的な研究者が人間の意識に関する知見を極めてしまったというわけでもない。我々は、最良の心理学者とともに、現在の知見が最終的なものだとは思わないようにと、人民に対して警告したい。精神的な力を無分別に規律が無いままに強調することに対しても、つまり降霊会、予言者、霊媒師らに頼る習慣にも懸念を表明したい<sup>21)</sup>。

ここで確認できるのはまず第一に、国教会がスピリチュアル・ヒーリングを実践するにあたって、心理学の力を借りるべきだという点である。これは、第一次世界大戦において戦争神経症が多発し、その治療に、無意識、副次的な意識をめぐる臨床心理学的知見、フロイト精神分析に影響を受けた心理療法が成功したことが背景にある<sup>22)</sup>。これは次章で詳説する点になるが、ここでも簡単に説明しておきたい。戦争神経症とは、戦場でのストレス負荷によって生じた、急性の精神神経疾患症状であり、身体の麻痺や無感覚状態を特徴とするものであった。一部の戦時病院では、この症状に対して心理療法が適用され、少なくない治癒事例が確認された。国教会の聖職者たちは、この経験に、スピリチュアル・ヒーリングを科学的に正当化する可能性を見出した。心理療法の技法を使えば物理的手段によらない身体的な症状の緩和が科学的に可能であり、それを援用することでスピリチュアル・ヒーリングも正当化できるのではないかと考えたのである。他方で、霊媒師や予言者らがスピリチュアル・ヒーリングを騙ることを警戒している点も確認できる。国教会がスピリチュアル・ヒーリングを推進するのは、魂の癒しという仕事を彼らから取り戻すためであり、彼らを後押ししてはならなかったのである。以上の決議からは、国教会が立たされた微妙な立場がよく見てとれる。

この決議に加えて、同年の 62 号決議では、スピリチュアル・ヒーリン

グの推進が医学の精神に反するものではないことが改めて表明されている。これも引用してみよう。

科学的研究に携わる献身的な人々と医学、外科、看護、衛生における進歩に感謝の意を表明したい。これらのヒーリングと疾病予防、苦痛の除去の手段の全ては、神の贈り物であり、我々にはそれらを、人類の福祉のために信仰心をもちながら用いる義務がある<sup>23)</sup>。

この医学の称揚からは、国教会がスピリチュアル・ヒーリングを推進する際、非科学的だと攻撃されることを恐れていたことがうかがえる。誤解の無いように補足するならば、国教会は大戦以前から、医学に限らず科学全般に対して接近を図っていた。例えば、ロンドン主教アーサー・フォーリー・ウィニントン・イングラム (Arthur Foley Winnington Ingram, 1858-1946) は、1911年の説教で、新しい科学への信頼感を表明し、優生学に基づく劣等種の絶滅を歓迎する旨を述べている<sup>24)</sup>。この発言の背景にあったのは、近視眼的にみれば、優生学とキリスト教が共有する西洋中心主義的志向であるが、他方では、教会が20世紀初頭から積極的に科学へ接近し、自らの影響力を保とうとしていたということでもある。

イングランド国教会の方針は以上のように定まり、その結果、スピリチュアル・ヒーリング検討委員会が始動することとなった。聖職者、心理学者、医者との協力体制が必要との考えの下、著名な医師、心理学者らが委員として任命された。医師、心理学者の委員には、内科医の権威クリフォード・オールバット (Clifford Allbutt, 1836-1925)、実験心理学の父 W・H・R・リヴァーズ (William Horace Rivers Rivers, 1865-1922)、イギリスへの精神分析の紹介者である医師のジェームス・アーサー・ハドフィールド (James Arthur Hadfield, 1882-1967)、そして精神科医ロバート・アームストロング・ジョーンズ (Robert Armstrong-Jones, 1857-1943) らがいた。この委員会の座長となったのは、オックスフォード主教ヒューバート・バージ (Hubert Burge, 1862-1925) であった。

この委員会での審議は、バージが友人に、実に難しい案件を任されたと告白するほどに難航した。スピリチュアル・ヒーリングの熱心な支持者であるアンソンが、委員会へのヒクソンの招致を強硬に主張したのである。

アンソンを除けば、他の委員はみな、聖職者と医師が協力関係を保つことができるような穏当な結論を望んでいた。そのため、神秘主義的なヒーリングの成果を強調するヒクソンとは距離をとりたがったのである。その後、肝心のヒクソンが南アフリカツアーを理由に委員会への参加を断ると、アンソン以外の委員はヒクソンに言及しない提言を模索した。しかし、アンソンはこれを本末転倒であると強力に抵抗し、ヒクソンのヒーリング手法である、手かざしと聖油の使用を軸とする報告書がまとめられた<sup>25)</sup>。

ヒクソンの手法を採り入れた一方で、報告書の主たる内容は、医師と心理学者に対して非常に宥和的なものだった。同報告書は、身体を看護するものと魂を看護するものの協同をうたい、宗教家たちは精神療法と心理学を学ぶべきであるとする、医学と宗教の画期的な協同宣言であった。しかも、宗教の役割を、信者に信頼、愛、神の理解をすすめることとしながらも、病者は聖職者に医師のような役割を期待すべきではないとも述べており、医師の領分を侵そうとはしなかった。

しかし、手かざしと聖油の使用だけは譲れない点であった。その結果、実にお粗末なことだが、オールバットとジョーンズが、聖油と手かざしに反対し、報告書への署名を拒否するという結末となった。オールバットとジョーンズの離反は大きかった。リヴァーズやハドフィールドは、医業界においては異端者とも言うべき存在であり、彼らの支持だけでは、科学と宗教の協同とは言いがたかった（ちなみに、リヴァーズは報告書刊行前に死亡している）。その結果、国教会はその後も何度となく、医師側にスピリチュアル・ヒーリングに関する検討委員会設置の話をもちかけた。しかし、その度に合意に達することはできず、第二次世界大戦後には、国教会側にはスピリチュアル・ヒーリングを推し進めるものはほとんどみられなくなった。

この帰結を見る限りは、国教会におけるスピリチュアル・ヒーリング熱は一過性のものであって、最終的に失敗に終わったものと評価することもできるだろう。国教会が、教会組織を用いて体系的にスピリチュアル・ヒーリングを実践することはなかったからである。しかし、興味深いのは、オールバットにしてもジョーンズにしる、最初からスピリチュアル・ヒーリングを拒否したわけではなかったということである。この最終的な結論に至るまでの過程においては、魂と精神の病を取り扱うものという立場を

めぐって、聖職者、心理学者、精神科医は争うわけでもなく、むしろ協力関係を築こうとした。次章では、いかにして科学と宗教の間での協力関係が構築されたのかを見てゆきたい。

### 3. 暗示の心理学とスピリチュアル・ヒーリング

スピリチュアル・ヒーリングをめぐる科学と宗教の協力関係は、19世紀末から20世紀初頭にかけての心理学の発展を基礎としていた。この心理学の発展とは、一つには学術的な実験心理学の発展、そして精神分析に代表される臨床心理学の発展を意味するものであった。19世紀までのイギリスにおいて、「心理学」(psychology)とは、学術的なものを意味しなかった。それが19世紀末になって学術的な装いを得るようになり、また無意識や副次的意識へ働きかける心理療法が開発されると、聖職者たちは、この新しい科学によって、スピリチュアル・ヒーリングを正当化できるのではないかと考えるようになった。

繰り返しになるが、19世紀末のイギリスにおいて、心理学は大学に基盤を置く確固たる学術分野ではなかった。心理学という言葉は、単に人間の行動を理論、法則として整理することを意味するだけのものであり、大学に所属する心理学者たちによる実験や観察に基づくものではなかった<sup>26)</sup>。例えば、イングランド実践的心理学クラブ (Practical Psychology Club of England) の創設者アナ・モード・ハラーム (Anna Maud Hallam) にとっての心理学とは、人間心理における霊的、あるいは宗教的な原因論も包摂するものであった。つまり、神学をインスピレーションの源とした人間心理に関する考察であった<sup>27)</sup>。

イギリス心理学は、1897年、W・H・R・リヴァースがケンブリッジ大学内に実験心理学教室を開設したことによって、学術的な転回を経験した。1901年になると、リヴァースらは、イギリス心理学協会 (British Psychological Society) を創設し、同協会は会誌『イギリス心理学雑誌』 (*British Journal of Psychology*) を創刊した。この雑誌の編集主幹には、戦争神経症の治療で有名となる心理学者チャールズ・サミュエル・マイヤーズ (Charles Samuel Myers, 1873-1946) が迎えられた<sup>28)</sup>。

この時点では心理学者の登場は、国教会に対してほとんど印象を残さなかった。リヴァース、マイヤースらが第一次世界大戦期に戦争神経症の治



療に活躍し、精神分析への社会的評価が高まってはじめて、彼らはその可能性に注目したのである。精神分析について改めて述べておくと、医業の世界において、これは不興を買っていた。症状を性的病因に還元する理論のために、批判の対象となったのである。しかし、リヴァースらは批判を避けて、無意識に働きかける心理療法だけを採り入れることで、戦争神経症の治療における効果を主張した。つまり、精神分析の病理学は避け、その心理療法だけを輸入し、新しい心理学の成果としたのである。

国教会の聖職者たちが心理学に眼をつけたのも、病理学ではなく治療法であった。彼らが特に関心を寄せたのは、心理学者ハドフィールドによる暗示 (suggestion) の研究であった。ハドフィールドの経歴について述べておくと、彼は、1882 年に南太平洋のロイヤルティ諸島で伝道師の家庭に生まれた<sup>29)</sup>。その後、オックスフォードのクィーンズ・カレッジ、エディンバラ大学などで教育を受け、1916 年にエディンバラで医業資格を取得した。その直後に海軍の外科医に転じたが、すぐに帰国し、オックスフォードのアッシュハースト神経科病院の神経科医となった。1920 年には、バーミンガム大学で精神療法の講師となり、学術的なキャリアを積む一方で、数年後にはロンドンで個人診療所を開業し、タヴィストック・クリニックにも勤務した。1931 年になると、ロンドン大学で精神衛生・精神病理学の講師の職責を得たことにより、力動的精神医学の伝道師としてより広く知られることとなった<sup>30)</sup>。

国教会の聖職者がハドフィールドに注目したのは、心理療法の一つである暗示がスピリチュアル・ヒーリングを正当化する可能性を秘めたものだったからである。ハドフィールドの研究は、精神の力が身体に与える影響を示すものであった。1917 年に医学雑誌『ランセット』(Lancet) に掲載された彼の論文は、催眠的暗示により水泡ができた症例、暗示により体温の上下動があった症例を報告するものであった<sup>31)</sup>。副次的意識への働きかけによって身体状態が左右できるとする、この論文は聖職者たちにとって重要な示唆をもっていた。彼らは、このハドフィールドの手法を援用すれば、聖職者が催眠状態の信者へ説諭することで信者の体調の不良を改善できるのではないかと考えたのである。つまり、ハドフィールドの研究が正しければ、信仰という思念的なものによって身体的な病もまた治り得るのではないかと、国教会によるスピリチュアル・ヒーリングは暗示の心理学



という科学的知見によって正当化できるのではないか。聖職者たちは、そう期待したのである。このような思考が、先に挙げた1920年ランベス会議での決議につながっている。

聖職者によるハドフィールドの援用を見る前に、ここで少し紙幅を割いて、当時の心理療法について説明しておきたい。20世紀初頭において、心理療法（psychotherapy）とは、人間の心理的な想像力を用いて疾患状態を改善することを意味するものである。実質的には、暗示や説得といった、19世紀末にフランスで発達した心理操作技法のことを指す。説得（Persuasion）とは、患者に彼が感じる症状が非合理的だと信じさせる技法である<sup>32)</sup>。例えば、患者に患者が抱く恐怖や不安の非在を訴えかけることで、病を生じさせる精神的諸力に対抗する力を育てるのである。ハドフィールドによると、軽度の症状であれば、説得はかなりの確率で有効だという。

他方で、暗示とは、ある特定の考えを人為的に患者の心理に埋め込んでゆく手法である。説得が合理的な考えを説くのに対して、暗示では、病理を解決するものであれば、その内容は直接的なものでなくてよい。また、暗示の内容について患者が判断する能力を下げるために、暗示を受容できる状態（催眠状態）にもってゆくことが必要となる。暗示受容性が確立されれば、そこで、患者の副次的意識に向けて、健康状態を維持するための訓示をすることができる。ここで、最終的には説得と同じ方向に向くわけである。

ハドフィールド心理学が聖職者たちに受け入れやすかったのは、彼が宗教に対して協調的な姿勢を示していたためである。これは、彼が聖職者の家庭に生まれたことと関係があるだろう。ちなみに、前出のオールバットとジョーンズもまた聖職者の家に生まれた医師であった。ハドフィールドは主著の中で、「心理学は宗教の助けとなるもの」であり、「人間の魂に関する理解」にもまた重要な示唆をもつものであると述べている<sup>33)</sup>。ハドフィールドは、既存の宗教と親和的な関係が築きうる、より穏健な心理学をイギリスに定着させようとしていたのであり、国教会の聖職者が好意的な反応を示したのも当然のことであった。

その一例をあげてみたい。1925年、ダラム主教ハーバート・ヘンズリー・ヘンソン（Herbert Henry Henson, 1863-1947）は、『スピリチュアル・ヒ

ーリング覚書』(*Notes on spiritual healing*) なる著作において、スピリチュアル・ヒーリングを心理療法的一种として定義し、教会が用いる際には心理学を参照する必要性を主張している<sup>34)</sup>。ヘンソンによると、聖職者による信仰心の奨励や病気を患う信者への励ましをすること、つまり告解と指導(direction)は、心理学でいえば暗示や説得といった治療法に相当するものであった。ヒクソン流のスピリチュアル・ヒーリングは、心理学による裏付けを得た半科学的、半宗教的な癒しの技術として再定義されたのである。

同様の考え方は、前出の「健康のためのギルド」においても認められるものであった。アンソンは、基本的には医学に対してあまり寛容ではない立場をとっており、身体的なヒーリングは霊的な次元でなされるべきという信念を持っていた。原則としては、病は神の意思に反するものであり、もし神の意思に沿う生活をしていれば、人は病からは自由でいられるというのである。しかし、敬虔な信者であっても病にかかりうる。そこでスピリチュアル・ヒーリングの登場となるわけだが、単に聖油と手かざしを主張するのではなく、暗示の心理学を参照し特殊な類の暗示、聖職者版の暗示を執り行うことを主張したのである<sup>35)</sup>。

聖職者版の暗示を行うにあたって、アンソンは、「スピリチュアル・ドクター」の育成を提案した。スピリチュアル・ヒーリングの担い手は国教会が育成すべきだというのである。アンソンは、急進的なスピリチュアル・ヒーリングの支持者であったが、この提案が医師や心理学者にとって、領域侵犯であるかのように映ることは理解していたようである。彼は、スピリチュアル・ヒーリングが医療や心理学の代替となるとは言わなかった。スピリチュアル・ドクターに関しても、国教会が資格を認可するような制度にすることも望まなかった。

こうした姿勢は、彼のギルドが実際にスピリチュアル・ヒーリングを施す際にも徹底されていた。1909年のギルドの年次報告書によると、筋無力症に8年間苦しんできた女性に対して、このギルドは6週間のスピリチュアル・ヒーリングを施したとされる<sup>36)</sup>。その際、スピリチュアル・ヒーリングに先立って、医師が呼ばれている。この医師によって不治の病だと診断がなされてはじめて、アンソンはスピリチュアル・ヒーリングを施したのである。結果、励ましの言葉を投げかけ寄り添うことにより、最終

的にかの女は自力歩行が可能ほどに回復したとされる。アンソンにとっては、病者が不治かどうかで棲み分けることが医師と聖職者の望ましい協力関係であった。

心理学的知見は、クリスチャン・サイエンスに関する議論においても援用された。ノリッジ大聖堂主任司祭ウィリアム・レフロイ（William Lefroy, 1836-1909）が、1903年にキリスト教知識普及協会から出版したパンフレットにおいて、精神の力は身体に対して優越するというクリスチャン・サイエンスの主張に言及した際のことである。レフロイは、身体的原因が見あたらない精神的な苦痛状態は心理学的な暗示によって緩和することができるとし、物質主義的な考え方だけでは病の治療は不可能だと述べた。その上で、クリスチャン・サイエンスの主張は心理学的にみても妥当だと論じたのである<sup>37)</sup>。

こうして、心理学的知見、特に暗示をめぐる知見は、聖職者がスピリチュアル・ヒーリングを正当化する際の典型的なクリシェとなった。そこで注意すべきは、これが精神科医と無縁の出来事ではなかったということである。レフロイの主張には、19世紀後半のイギリスを代表する精神科医であるヘンリー・モーズリー（Henry Maudsley, 1835-1918）の著作から以下の言が引かれている。

おそらく我々は、内科医として、病の創出における精神的要因を十分に考慮していないのだろう。あるいは、病を治すうえで、それを十分に活用することの利点を見逃しているかもしれない。〈中略〉最も有能な内科医とは、治療に絶対の自信を持ちながらも、患者の想像力を強めたり、弱めたりできる人物である。もし彼が数滴のペパーミント水を、病を治そうとする自信に満ちた雰囲気 で用いたならば、もっともよく認知された科学的なやり方で治療するよりも、確実な結果がもたらされるだろう。患者を回復させるのだという確信を表明しなければ、結果は望めないだろう<sup>38)</sup>。

ここでレフロイが言わんとしたことは、モーズリーの言う、ペパーミント水を自信を持って提供することで患者の想像力を調整することが、心理学の言うところの暗示だということである。そしてさらなる含意は、国教

会版のスピリチュアル・ヒーリングにおいてペパーミント水は「聖油」に置き換えられうるということであった。しかし、それを言うのに、わざわざ精神科医の言葉を引いたことには注目が必要である。国教会聖職者たちは、医師との衝突を避け、彼らとの協力関係を模索する際、精神科医たちとも良好な関係を築こうとしていたのであろう。それは、ジョーンズをスピリチュアル・ヒーリング検討委員会に招いたことから理解できる。それでは、精神科医にとって、スピリチュアル・ヒーリングとはどのような問題だったのか。この点を次章では見てゆきたい。

#### 4. 精神医学とスピリチュアル・ヒーリング

心理学者ハドフィールドが教会にすり寄り、聖職者がスピリチュアル・ヒーリングを正当化するために暗示の心理学を好んで援用するようになったとき、精神科医はどのように関わりを持ったのか。繰り返しになるが、当時の精神科医たちは総じて、精神分析や心理学に否定的な態度で応じたことを思い返さねばならない。精神科医にとって、精神分析医と心理学者はいわば縄張りを争う競合相手であり、彼らの主張を事あるごとに否定し排除したのである。

しかし、スピリチュアル・ヒーリングの問題に際しては、暗示の心理学、そしてそれを援用する国教会聖職者たちは必ずしも競争や排除の対象とはならなかった。それは第一義的には、身体に対する精神の優越という主張が、精神科医たちがかねてから訴えてきたことだったからである。この主張に関しては、精神科医は聖職者たちと手を結ぶことは可能だった。前節で述べたモーズリーの引用はその証左である。また、その勢力に衰えが見られつつあったとはいえ、国教会は依然としてイングランドにおいて無視できない巨大組織であった。彼らの意向を無下にし、スピリチュアル・ドクター構想を門前払いにできるほど、精神科医という集団は強力ではなかった。1914年のイングランドにおいて、精神科医は数万人いる医師の内 で 500 名弱の勢力だったのである。

そこで採られた戦略は実にわかりやすい。暗示の心理学を横取りしようというのである。精神科医が築いてきた精神医学理論を一旦よそにおき、暗示の心理学をわがものにし、聖職者との協力関係の中心に収まること、これが、スピリチュアル・ヒーリング問題に対する精神科医の処世術であ

った。

これは、20世紀初頭においても、イギリス精神科医たちは、精神の病について有効な理論を確立できずにいたことが背景にある。ダニエル・ハック・テューク (Daniel Hack Tuke, 1827-1895)、トマス・スミス・クラウストン (Thomas Smith Clouston, 1840-1915)、モーリス・クレイグ (Maurice Craig, 1866-1935) ら、当世の精神医学の教科書を執筆した有力な精神科医たちは、精神の病を身体的な原因に還元し、論じようとしていた。彼らは、遺伝、栄養、脳への刺激と反応、神経の疲労、血液循環の不順を、精神疾患の主要な病因として理解していた。これは、ヒポクラテスの養生論、19世紀後半の生理学、大陸精神医学の脳病説、ヒューリングス・ジャクソンらが成果を挙げた神経学の理論などを折衷したものである。

もう少し詳しく述べるならば、クレイグは血液の状態を精神疾患の主たる病因だと主張しているのだが、その理由は身体的な疾患の場合も血液状態が重視される傾向があったからであり、独自の精神病理学があったわけではなかった<sup>39)</sup>。同時代の他の精神科医も血液の状態を重視し、栄養不足や飢餓状態から生じる精神疾患症状を強調している<sup>40)</sup>。こうした仮説を唱えたとき、彼らは、精神病院での臨床的観察を用いることで独自性を主張した。しかし、最終的な結論は、身体をめぐる医学とほとんど変わりがなかったのである。

他方で、当時の精神医学は、精神分析よりも、性に関して道徳的な示唆を含むものであった。例えば、クレイグは、性欲の過剰を主たる病因の一つとみなしている。彼によると、性交はエネルギーの消費であり、生命を危険にさらす行為であった。以上の仮説は、精神科医たちによる精神分析の還元論的病理学への批判を考えると、それと同様に患者に対して道徳的な非難を含むものであった。

この身体的な観点と道徳的な観点による精神医学は、第一次世界大戦期における戦争神経症の多発によって、見直しを迫られていった。それは、脳、遺伝、血液、体温、性欲などにかかわらず、多くの人々が精神疾患にかかりうることを戦争が証明してしまったからであり、無意識と副次的意識への働きかけによる心理療法が一定の成果を挙げたからである。その結果、精神科医たちは心理療法と向き合わざるをえなくなった。その結果、

大戦以前は毛嫌いし、ほとんど目も向けなかった精神分析や心理学の手法を援用してゆくのである。

ただし、精神分析を批判し、リヴァースやマイヤーズの主張を遠ざけていた手前、精神科医たちはその手法を公然と援用するわけにはいかなかった。彼らは水面下で心理療法を援用するようになったのであり、その援用の際も模倣を疑われないよう慎重さを期したのである。前述した 1920 年スピリチュアル・ヒーリング検討委員会の委員であった精神科医ロバート・アームストロング・ジョーンズの議論が好例となる。

ジョーンズについて改めて確認しておく、彼は、20 世紀初頭を代表する精神科医の一人である。彼はどちらかというと、クレイグに近い古いタイプの精神病院医であり、心理学には疎いほうであった。その彼が、大戦後の時期になると、心理学に関する発言を増やしていった。それは、スピリチュアル・ヒーリング問題に関して聖職者との協力関係を築く上で、暗示の心理学をわがものとすることに価値を見出したからだだったと思われる。

大戦以前の彼は、心理学に否定的であり、特にフロイトの性的病理学を嫌悪していた。しかし、第一次世界大戦において心理療法が広くもちいられるようになると、積極的に意義を認めるようになった。ただし、フロイトを肯定したわけではなかった。むしろフロイトから離れたところで、心理療法は有効なものだとした。説得や暗示といった心理療法の技術は、フロイトや臨床心理学に固有のものではなく、また非医学的な場面でも日常的に用いられるものだとして主張したのである。この主張について、彼が 1926 年に『コンテンポラリー・レビュー』(*Contemporary Review*) というオピニオン雑誌に発表した論文を見てみよう<sup>41)</sup>。

ここで彼は、まず、心理療法には 4 つの手法があると整理した。(1) 再教育 (Re-education)、(2) 暗示、(3) 説得、そして (4) フロイト精神分析である。この分類からは、精神分析は心理療法の一つにすぎないという彼の考え方がうかがえる。事実、この論文で彼は、無意識下に抑圧された性にまつわる記憶だけが、精神の失調をもたらすものではないと述べている。なぜならば、戦争神経症にかかった兵士のほとんどは、性にまつわる記憶ではなく、戦場の恐怖や苛酷さから精神の失調へといったからである。彼はこうした点をもって、スピリチュアル・ヒーリングに関して、精



神分析は何の助けにもならないと結論づけている。

ジョーンズは、フロイト精神分析という選択肢を排除した上で、暗示の有効性を主張した。催眠状態においた患者の副次的な意識に対して、あるべき健康な行動をなぞるよう仕向けること、それが可能だと信じさせることによって、身体的な状態は改善するとしたのである。心理学に疎い伝統的な精神科医であるジョーンズものとはにわかには信じがたい主張である。

さらにジョーンズは、日常的性格を強調することで、暗示は医師や心理学者だけではなく聖職者や教師も実践可能なものと論じた。日常のかつ応用可能なものとすることで、心理療法をフロイトの占有物にはしなかったのである。こう論じるにあたって彼が挙げたのは教師や聖職者という事例であった。ジョーンズは、彼らの仕事は、学生や信者の意識を啓蒙し、あらぬ感情を正し、より道徳的で希望のある方向へと導くことだとし、それは心理学でいうところの説得、再教育にあたると主張した。そして特に、信者の信頼を得ている聖職者にはそれが容易にできるはずだと述べ、聖職者のスピリチュアル・ヒーリングに道を拓こうとしたのである。

ジョーンズは、暗示の日常的性格という話題を他所でも好んで取り上げた。1925年1月、聖バーソロミュー病院で行われた薬剤師の団体が主催した講演において、彼は、薬剤処方における暗示の効果に言及している。薬剤師に対して心理療法の力を説くという、身体的効果をもたらす物質の提供という薬剤師本来の任務とそぐわないイメージがあるかもしれない。ジョーンズは、その点を意識したうえで、精神が身体に及ぼす力、今日で言うところのプラセボ効果が、薬剤処方の重要な効果であると述べた。医師の場合で言えば、厳粛で背高帽をかぶった医師が小瓶を持ち出すという仕草は、治癒を望む患者の精神に大きく働きかけるものであり、薬剤師もまた処方の際の身ぶりに注意すべきだと主張したのである<sup>42)</sup>。ただし、これは厳密に言えば暗示ではない。催眠状態にある患者に対して、その副次的意識や無意識へ働きかける技法が暗示であり、ジョーンズの言ったことは明らかに、にわか素人の言であり、精神科医による心理学の横取りのようなものだったのである。

前出の1926年の論文に戻ると、一つ興味深い点は、聖職者が暗示を用いる場面を限定していたことである。ジョーンズの考えでは、聖職者が暗



示を用いることが許されるのは、医師が患者の身体を医学的に検査し不治の病と診断した場合のみであった。つまり、医師の手に負えない場合のみ、ターミナル・ケア（終末期医療）としての観点においてのみ、聖職者によるスピリチュアル・ヒーリングは肯定されたのである。ここには、スピリチュアル・ヒーリングを認める代わりに、医師の縄張りには立ち入らせないという意思表示が見てとれるだろう。

聖職者のスピリチュアル・ヒーリングを認めつつも、ジョーンズは、聖油の使用と手かざしは許容できなかった。それは、医師の多くが聖油の使用と手かざしには批判的であったからである。1920 年スピリチュアル・ヒーリング検討委員会の報告書の内容が明らかとなると、医療メディアには批判的な論調が展開された。『イギリス医学雑誌』の編集主幹は、ヒクソンの治療法をほとんどそのまま肯定し、聖油の使用を認める報告書の結論については合理主義者を満足させないものと強く非難した<sup>43)</sup>。『ランセット』の編集主幹も同様に批判的であった。身体に対する精神の影響については肯定するのだが、腸チフスや骨折は祈祷で治らないと、信仰による治療にはあくまで否定的な意見を述べている<sup>44)</sup>。ジョーンズが聖油と手かざしに反対したとき、それは医業界の主流派に沿った振る舞いだったのである。

以上をまとめると、精神科医は、スピリチュアル・ヒーリング問題に際して、専門家としての権威の保全と拡大を念頭においた行動をとったと言えるだろう。国教会聖職者が主張する暗示的手法を利用したスピリチュアル・ヒーリングには一定の賛意を寄せたうえで、彼らに対する心理学者の影響力を削ぐべく、暗示の心理学を自らの学問の一部であるかのように装った。また、聖職者への賛同は、自らの専門領域を減じないように、ターミナル・ケアの領域に留めることを企図しており、その点も拔かりがなかった。つまり、精神科医は、聖職者を従軍牧師や刑務所の礼拝をするチャブレンと同程度にしか見ていなかったのである。専門領域を保全できる限りにおいて、聖職者の存在を許容する。そのような振る舞いがここに確認できるのである。

### おわりに

本論文で見てきたように、20 世紀初頭にいたっても、魂は病に係わる

語彙の一つであった。身体的な不調、精神的な状態の失調を魂の不全に帰し、信仰による治療を試みることは、時代錯誤なことではなかった。近代化が進む時代状況においては、超自然的なものへの信仰もまた勢いを増したのである。その一例が、スピリチュアリズムとその申し子スピリチュアル・ヒーリングであった。ただし、信仰による魂の治療が社会的に流行したことは、近代主義者たちよりも宗教界に大きな衝撃を与えた。それは、スピリチュアル・ヒーリングが初期キリスト教会の癒しの秘儀を再興しようというものであり、教会側がその手法を取り入れて信者獲得を目指すのか、あるいは科学信仰という時代の潮流に乗ってオカルト的なものとして拒絶するのかは大きな決断だったからである。イングランド国教会の末端聖職者たちは、スピリチュアル・ヒーリングに信者獲得の可能性を認めたが、高位聖職者たちは、その神秘主義的な手法が医者たちに批判されることを強く恐れていた。そこで、彼らは、スピリチュアル・ヒーリングは暗示という心理療法の一種であると主張し、自らの科学性を装った。そうすることで、精神科医や心理学者からのお墨付きを得て、教会版スピリチュアル・ヒーリングを展開しようと試みたのである。このような動きに対して、精神科医と心理学者たちの反応は悪くなかった。病者に精神的な励ましを行う程度であれば、許容範囲であった。しかし、国教会側は、聖油と手かざしという初期教会特有のヒーリング手法にこだわりを見せ、それが最終的に精神科医たちとの意見の不一致を招くことになった。細菌学や外科技術の進展など、医学の進歩が目覚ましい時代にあって、聖油と手かざしのような神秘主義的なふるまいは許容されず、最終的に、聖職者たちのスピリチュアル・ヒーリング実践への道は、終末期医療を除いて、閉ざされていった。<sup>45)</sup>

精神の失調という問題領域をめぐる交渉に、スピリチュアル・ヒーラー、イングランド国教会、心理学者、精神科医は、それぞれの思惑から参加し、病んだ精神（あるいは魂）を看るべきは誰なのかを争った。宗教と科学の争いは、20世紀前半においてもなお顕在だったが、その帰趨を左右したのは心理学的知見を誰がわがものとするかだった。それを巧みに操ったのは、聖職者でも心理学者でもなく、精神科医たちだったのである。

## 註

- 1) ジャネット・オッペンハイム, 和田芳久訳『英国心霊主義の抬頭』工作舎, 1992 年, 88-91 頁.
- 2) 英米圏におけるスピリチュアリズムの興隆については, フランク・ポドモアによる批判的な研究書とアーサー・コナン・ドイルによる信奉者側からの歴史書が古典的な著作として挙げられる (Frank Podmore, *Modern spiritualism: a history and a criticism*, London: Methuen, 1902; Arthur Conan Doyle, *History of spiritualism*, Cassell and co, 1926) 学術的な研究としては, Geoffrey K. Nelson, *Spiritualism and society*, New York: Schocken Books, 1969; Alex Owen, *The darkened room: women, power and spiritualism in late Victorian England*, London: Virago, 1989; Alex Owen, *The place of enchantment: British occultism and the culture of the modern*, Chicago; London: University of Chicago Press, 2004.
- 3) Stuart Mews, "The revival of spiritual healing in the Church of England, 1920-26", W. J. Sheils (ed.), *The Church and healing: papers read at the Twentieth Summer Meeting and the Twenty-first Winter Meeting of the Ecclesiastical History Society*, Oxford: Basil Blackwell, pp. 299-331.
- 4) Doyle, *op.cit.*, 1926.
- 5) Geoffrey K. Nelson, *op.cit.*, pp. 162-172. この摘発の根拠となったのは, 公衆の面前でトランス状態で発話することや霊的手段によるヒーリングを犯罪行為とする 1824 年浮浪者法 (Vagrancy Act, 1824) と 1735 年魔女法 (Witchcraft Act, 1734) である. この二法は, 最終的に, 1951 年偽霊媒師法 (Fraudulent Mediums Act) によって廃止された.
- 6) Stuart Mews, *op.cit.*, pp. 306-307. ヒクソンの伝記情報については, "Mr. J. M. Hickson: Missons of spiritual healing," *Times*, 46602, 1933, p. 9.
- 7) Stuart Mews, *op.cit.*, p. 312.
- 8) 聖バルナバ・ミッションについては, 廣川和歌『近代日本のハンセン病問題と地域社会』大阪大学出版会, 2011 年を参照.
- 9) James Moore Hickson, *Heal the sick*, London: Methuen, 1924, pp. 81-88.
- 10) "Spiritual healing missions", *British Medical Journal*, 2 (3330), 1924, p. 775.
- 11) James Moore Hicson, *op.cit.*, p. 265.
- 12) エディの伝記情報については, Sibyl Wilbur, *The life of Mary Baker Eddy*, Boston: Christian Science Publication Society, 1913 を参照.
- 13) Mary Baker Eddy, *Science and Health with Key to the Scriptures*, Boston: E. J. Foster Eddy, 1896.
- 14) Stuart Mews, *op.cit.*, pp. 310.
- 15) Callum G. Brown, *Religion and society in twentieth-century Britain*, Harlow: Pearson Longman, 2006; Callum G. Brown, *The death of Christian Britain: understanding secularisation, 1800-2000*, London; New York: Routledge, 2001.
- 16) Stuart Mews, *op.cit.*, p. 309.
- 17) *Ibid.*, p. 312.
- 18) *Ibid.*, pp. 312-313.

- 19) The Lambeth Conference, resolution archive from 1920, Anglican Communion Office, 2005.
- 20) Ibid.
- 21) Ibid.
- 22) Martin Stone, "Shellshock and the psychologists," William Bynum, Roy Porter, and Michael Shepherd (eds), *The anatomy of madness: essays in the history of psychiatry*, London, 1985, pp. 242-271
- 23) The Lambeth Conference, resolution archive from 1920, Anglican Communion Office, 2005.
- 24) Stuart Mews, *op.cit.*, pp. 307-308.
- 25) *Ministry of Healing*, Society for the Promotion of Christian Knowledge, 1924, p. 16-21.
- 26) Stuart Mews, *op.cit.*, pp. 116-124.
- 27) Ibid., pp. 124-130.
- 28) G. C. Bunn, A. D. Lovie and G. D. Richards, *Psychology in Britain: historical essays and personal reflections*, Leicester: British Psychological Society, 2001, pp. 1-5.
- 29) "James Arthur Hadfield", *The Lancet*, 290 (7516) , 1967, pp. 618-619.
- 30) "J. A. Hadfield", *British Medical Journal*, 3 (5567) , 1967, p. 742.
- 31) J. A. Hadfield, "The influence of hypnotic suggestion on inflammatory conditions, *The Lancet*, Volume 190 (4914) , 1917, pp. 678-679.
- 32) J. A. Hadfield, *Psychology and mental health: a contribution to developmental psychology*, London: Allen & Unwin, 1950.
- 33) Ibid, 1950, pp. 391-401.
- 34) Herbert Hensley Henson, *Notes on spiritual healing*, London: Williams & Norgate, 1925.
- 35) Harold Anson, *Spiritual Healing: a discussion of the religious element in physical health*, University of London Press, 1923.
- 36) Stanley Bousfield, "Spiritual healing and the 'Guild of Health'", *British Medical Journal*, 2 (2590) , 1910, pp. 464-465.
- 37) William Lefroy, "*Christian Science*": *contrasted with Christian faith, and with itself*, London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1903.
- 38) Ibid., pp. xi-xii.
- 39) Maurice Craig, *Psychological medicine: a manual on mental diseases for practitioners and students*, London: J. & A. Churchill, 1905.
- 40) Charles Arthur Mercier, *A text-book of insanity: and other mental diseases*, London: G. Allen and Unwin, 1914.
- 41) Robert Armstrong Jones, "The ministry of healing, psychological and psychic", *Contemporary Review*, 130, 1926, pp. 190-195.
- 42) Robert Armstrong-Jones, "Suggestion in social life," *The Lancet*, 206 (5327) , 1925, pp. 705-710.
- 43) "Spiritual healing in the English church", *British Medical Journal*, 1 (3290) , 1924, pp. 119-121.

- 44) "Spiritual healing: the cure and the cure," *The Lancet*, 203 (5239), 1924, p. 189.
- 45) 終末期医療におけるスピリチュアル・ヒーリングについて補足するならば、それは今日まで生きながらえているということに触れなければならない。英米圏の病院内では、スピリチュアル・ヒーラーたちが回復の見込みのない患者の看護の一端を担い、クリスチャン・サイエンスも往年の勢いはないものの活動を続けている。こうしたスピリチュアル・ヒーリングの役回りは、20 世紀中葉に、指導的なヒーラーのハリー・エドワーズ (Harry Edwards, 1893-1976) と彼が設立したイギリス心霊療法連盟 (National Federation of Spiritual Healers) によって先鞭が付けられた。エドワーズは、スピリチュアル・ヒーラーを医療の現場に派遣する活動を推進し、1950 年代以降、少なくない病院施設に会員を公式に訪問させる許可を得た。その結果、イギリスの 435 の病院のうち 235 施設が、スピリチュアル・ヒーラーの受け入れを許可するにいたったのである。このことは、20 世紀の後半に至っても、魂の治療という問題がキリスト教社会において重要視されていたことを示唆している (Jules Evans, "Spiritual healing on the NHS?", *Times Online*, July 14 2008).

